

万葉文化館開館20年の歩みを照らす



岡橋萬帆氏の大作「すすき野」



野々内良樹氏作「白孔雀」



鹿見喜陌氏作「想」



井上穂氏作「畝傍山」

【前期作品】



野々内良樹氏作「なべの」

【後期作品】 (万葉文化館提供)



内藤定昭氏作「春薬師寺」



烏頭尾精氏作「山翔ける」



金森良泰氏作「曙光」

県立万葉文化館が開館して20年を記念する「万葉コレクション展～万葉文化館20年の歩み～」が明日香村飛鳥の同館で開かれている。令和4(2022)年3月13日まで。

前期・後期で計120点展示、来年3月13日まで 万葉コレクション展

同館は現代日本画家らにより描かれた「万葉日本画」154点を収蔵作品の核としてスタート。今年9月に開館20周年を迎え、700点以上の幅広い作品を所蔵するまでになった。

同展では、日本画や洋画といった絵画作品に加え、素描や下絵などを併せた多彩な作品を前期、後期に分けて、それぞれ60点ずつ展示。前期は来年1月23日まで、後期は全作品を入れ替える。

今、展示されている前期作品の中には、平成13(2001)年に77歳で死去した岡橋萬帆氏の代表作「すすき野」も。日本画に洋画の質感を取り入れた技法と、古を追懐する主題により個性的な画風には定評がある。

また、同館のコレクションの中でも大きな割合を占めている。さらに、現在も明日香の地で創作活動が続ける日本画家の烏頭尾精氏の作品は、前期に8点、後期に9点出展。色彩の透明感と深みが特徴の穏やかな画風で知られ、古都を愛する素直な描写が印象的。

後期で注目されるのは、フレスコ画家の金森良泰氏の作品。フレスコ画は生乾きの漆喰(しっくい)に絵を描く洋画の技法。金森氏はフレスコ画の技法で奈良の風景や、飛翔する天女たちを描いている。1月30日午後2時から、担当学芸員によるギャラリートークがある。

月曜休館。開館時間は午前10時～午後5時30分(入館は午後5時まで)。観覧料は一般600円、高校・大学生500円、小・中学生300円。問い合わせは同館 ☎0744(54)1850へ。